



明 治三十八年に柏原中学校を首席で卒業した永井幸太郎は、長兄に勧められるまま神戸高商（現神戸大学）に進んだ。幼い頃からおとなしい性格だった彼は、のちに世界貿易の主役になろうとは夢にも思っていなかった。

卒業後は、いったん外資系の石油会社に就職。ところが、一年後、神戸高商で親しかった同級生の高畑誠一が勤める貿易商社、鈴木商店に移った。地味ながら類まれな実務能力をもつ永井を、高畑が引き抜いたのだ。明治四十三年春のことであった。

昭和二年四月、鈴木商店は金融恐慌の波に押し潰されて倒産。

永井と高畑の二人は、銀行や取引先に頭を下げて残務処理に走り回りながら「鈴木の命流を絶やすまい」と密かに誓い合っていた。そして、わずか十カ月後の昭和三年二月、社員三九人という小所帯ながら、再び貿易業界に名乗りを上げた。株式会社日商（現日商岩井）の創立である。日商はその後順調に成長し、昭和二十年、永井は取締役社長となった。

この頃から彼の経営手腕は、政財界で広く知られる

**金融恐慌で倒産した
鈴木商店を再建し、
総合商社「日商岩井」
を軌道にのせる**

永井幸太郎

(兵庫県立柏原中学校第四回卒業生)



二重橋の前で撮った記念の写真

ようになった。二十二年二月、当時の吉田茂首相から要請されて貿易庁長官の座についた。民間大臣として石炭、石油の輸入を軸とする戦後経済の復興という重責を担ったのである。

二年後、期待どおり壊滅状態だった産業界を復興の軌道へとのせた永井は、再び日商の社長に戻った。堅実経営で不況に強い体質づくりに努め、さらに業績を伸ばしたが、二十九年、健康を理由に第一線を退いた。

柔和な人柄で人をまとめ、地味ながら着実に物事を処理する能力にたけていた永井は、日本の激動の時代を支えた。まさに丹波を代表する財界人の一人と言えるだろう。

引退後は、びつくりするほど穏やかな人間に変わってみえたが、誠実・廉直さは終生変わることがなかったという。昭和五十八年一月没。享年九十五歳であった。